

## 〈書評〉

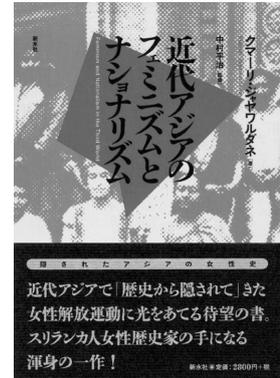
クマーリ・ジャヤワルダネ 著

中村平治 監訳

### 『近代アジアのフェミニズムとナショナリズム』

(新水社 2006年 340頁 ISBN: 4-88385-088-9 2,800円+税)

Jayawardena, Kumari. *Feminism and Nationalism in the Third World*,  
London and New Jersey: Zed Books Ltd., 1986.



中村 雪子

クマーリ・ジャヤワルダネ (Kumari Jayawardena) によると、本書はオランダ国立社会科学大学院大学 (ISS) に新設された「女性と開発プログラム」のためにジャヤワルダネ自身によって1982年に執筆された単著<sup>1</sup>の改訂拡大版である。トルコ、エジプト、イラン、インド、スリランカ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、中国、朝鮮、日本の11カ国<sup>2</sup>を舞台に展開した初期フェミニズムを、植民地支配下の近代化の中で登場した「新女性」に主眼を置きながら考察している。1986年ゼッド出版社より刊行された本書を日本語版にするにあたり、訳者らは新たに各国のフェミニストたちの写真を掲載している。中でも目を引く写真は、1931年に北インドのラーホールで開催された初の国際的なアジア女性会議に、各々の民族衣装を身にまもって集った女性たちの集合写真である。しかし、ページを繰っていくにつれて、アジアにおける初期フェミニズムの結びつきは、写真に見られるような集合的なものではなく、遠く離れて在る点と点が弧を描いて結びつく軌跡のようなものとして現れていることが分かってくる。

本書の目的をジャヤワルダネは「日本語版への序文」において、以下のように明確に述べている。「アジアの女性史を研究課題にすることによって、私は以下の点を証明することを念願としていました。すなわちアジアの女性運動は西欧の女性たちの権利主張を真似たものでも、引き写したのものでもなく、経済的な搾取と社会的な抑圧への家父長的な服従に対する、彼女たちによる抵抗の長い歴史があったという事実です (p. I)」。本書はそれまで西欧の女性史に比べ記述されることの少なかった、アジアの初期フェミニズムをナショナリズムと関連づけて取り上げ分析することで、その目的を十分に果たしている。一人の著者が複数の地域の歴史的事象に関して執筆するという本書の体裁は、必然的に二次資料という限定された資料に拠ることになる。そのため、本書中ではしばしばデータの正確さや深さに欠ける記述が見られるが、同時に「アジア」の西から東において起こったフェミニズムの動きを連動性ある形で描くことに成功した。各章を通して、フェミニズムが西欧から植民地諸国へ一方的にもたらされた思想ではなく「資本主義と国民国家の諸勢力によって起動した、経済的・社会的な変動の所産であった」(p.316)という著者の一貫した視点があることは、各事例における植民地・半植民地的な支配・被支配の形態、被支配側内部における支配・被支配の構造、主に宗教的背景に文脈づけられたナショナリズム・民族運動との関連の中で発展し、制限されていった各々のフェミニズムのあり方の差異が浮き彫りにされるこ

とになった。

では、本書はどのような時代背景の中で出版されたのであろうか。ISS版とゼッド出版社版が出版された1982年、1986年という年代の中に位置づけるのであれば、1975年の第一回世界女性会議（メキシコ・シティ）に実質的に端を発する国連主導の行政フェミニズムが世界的に推進されていた時期である。さらに1975年の女性会議においてすでに提起されていた第三世界から第一世界への、霸権的・西欧中心的フェミニズムに対する異議申し立てが、1985年のナイロビ会議において顕在化した時期でもあった。この時期において、本書はフェミニズムを第三世界と二項対立的な構図に置かずに論じた。西欧思想と帝国主義などの諸要素の影響を受けつつ、第三世界の文脈に根ざしたフェミニズムが構築されてきたことを説得的に示したことで評価されるべきであろう。1988年にチャンドラ・モハンティ（Chandra Mohanty）は西洋のフェミニストたちがその研究蓄積の中で絶えず第三世界女性を「無力」で「か弱い」存在と表象し構築することによって、西洋中心的な視点を再生産してきたことを指摘した<sup>3</sup>。その意味で本書のアジア諸国の事例はモハンティの問題意識を共有しつつ、第三世界女性の運動を書き換えたものといえるだろう。

また、理論的貢献としては、タイトルにあるように「ナショナリズム」との関連性——フェミニズムがナショナリズム運動・民族独立運動において積極的かつ中心的な役割を果たしていたことと、同時にフェミニズムがナショナリズムの内部に配置されていたこと——を描き出し、当時のフェミニズムの限界と課題を浮き彫りにしていることが評価できる。換言すれば、フェミニズムが近代主義の産物であり、その発展段階ではナショナリズムと共謀関係を結んでいたことを指摘しているといえる。当時のアジア諸国における第一波フェミニズムは、トランスナショナルな性質を帯びながら、ナショナリズム／国民国家(nation-state)に規定されていた。本書においてその動きが最も特徴的に示されているのは、著者が「アジアの事例研究の中で最も興味あるもの」(p. I)とした日本の初期フェミニズムに関する章である。この章で特に指摘されていることは、以下の2点である。①「日本は先進資本主義国として劇的に台頭し、経済的には他のアジア・アフリカ諸国に先んじたが、女性の権利に関する面ではもっとも後進的な国の一つとなった。その反面で女性が要求した二つの領域（すなわち教育と雇用）については、容易に与えられた。(中略)しかしこれらの華々しい成果は、従順と服従の思想を広めるのにも役立った(p.313)」。②「本書で論じたすべての国々のなかで、日本のフェミニストの意識は最も高い水準にまで発展した。そこには政治や経済の次元での要求だけではなく、伝統的な男女観や家族における女性の役割から派生する問題が含まれていた(p.313)」。ジャヤワルダネは、この日本の事例から、資本主義的な近代国家形成の過程では女性に特定の権利は付与されるが女性解放の本当の課題は阻止される結果になっていること、また、日本の初期フェミニズムの発展には高度な工業化の進展による物質的基盤が必要な条件を提供していたと分析を加えている。この文章は、現在の日本の女性をめぐる状況につながる問題を指摘している。

それでは、本書は、現在の日本においてどのように位置づけられるのであろうか。この問いは、日本語訳にあたって「第三世界」に代わって「近代アジア」という用語がタイトルに採用されていることにも関連するだろう。ジャヤワルダネが「第三世界」をタイトルに配しつつ、「アジア」の女性史の掘り起こしを試みたのは、同地域の学問的蓄積が不足していたからであった。しかし、現在の日本の文脈において「近代アジア」をタイトルに採用することは地理的な意味とは別の地政学的な意味を帯びてくる可能性がある。「第三世界」のタームが含意していた植民地主義への対抗的意図が失われ、「近代アジア」の内部に在った支配／被支配の関係性を見えにくくしてしまうのではないだろうか。この視点から、反省的に指摘すべきなのが本書中で取り上げられているアジア諸国の中で、日本が唯一近代的な意味での

植民地支配を行っていた側であることだ。本書では、植民地支配からの独立闘争への原動力として第三世界のナショナリズムが肯定的に描かれているが、日本においてはナショナリズムが結果としてアジア諸国への軍事的進出を導いた。その点で、フェミニズムも潔白ではないことはその後の研究蓄積によって明らかにされている<sup>4</sup>。

これまで論じてきたように、本書においてはアジアのフェミニズムをめぐる議論として、主に以下の三点が示されている。①アジア諸国における初期フェミニズムは、民族独立運動・ナショナリズム運動において積極的な役割を果たした。②また、アジアの初期フェミニズムは西欧諸国から一方的にアジア諸国に導入された思想ではなく、資本主義と近代国民国家のプロジェットの進展の中でアジア諸国においても独自のプロセスを経て構築された思想である。③民族独立運動・ナショナリズムと連動し発展した初期フェミニズムは、同時にその内部に配置され規定されることにもなった。さらに一点つけくわえるならば、本書はフェミニストのトランスナショナルな結びつきが、旧宗主国—旧植民地間だけではなくアジア諸国間においても19世紀にたどることができることを再確認させてくれるものでもある。「アジア」をめぐる政治経済体制が20年前とは大きく変化した現在は、女性たちが国家に規定されつつも、また別の諸要素によって分断され、フェミニズムの実践と理論がより厳しく試されている時代と言えるだろう。その中で、筆者のみるところでは、韓国の梨花女子大のアジア女性学センターを中心にしたいくつものプロジェクト<sup>5</sup>や日本ではお茶の水女子大学ジェンダー研究センターが中心に行っている「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」研究などは、ジャヤワルダネの問題関心を引き継ぎ現在の状況に文脈づけながら発展させている貴重な研究蓄積としてあげられるだろう。これらの研究は、うっすらとした弧状の軌跡としてしか現れ得なかった「アジア」のフェミニズムの結びつきが、国際共同研究の形をとって発展的に試みられている事例といえる。かつ、第三世界出身ではあるが地理的には西欧的知の中心において議論を展開したジャヤワルダネやモハンティと異なり、非西欧である「アジア」発のフェミニズム／ジェンダー研究を名実共に体現するものとしてもみることができる。そのような試みに当然埋め込まれている「アジア」、「フェミニズム」をめぐる植民地主義、ナショナリズム、階級の交差する複雑な問題構成に立ち向かうとき、本書は貴重な参照点の一つとなる。

(なかむら・ゆきこ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

## 注

- 1 Jayawardena, Kumari, *Feminism and Nationalism in the Third World in the 19<sup>th</sup> and early 20<sup>th</sup> Centuries*, The Hague: ISS, 1982 が書かれた経緯は、以下のジャヤワルダネのインタビュー記事に詳しい。Chhachhi, Amrita, "Reflections: Kumari Jayawardena." *Development and Change* 37, 6 (2006): pp.1335-1346.
- 2 原書では第五章にアフガニスタンが入り、全12章で構成されているが日本語版では割愛されている。
- 3 Mohanty, C.T., "Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses." *Feminist Review*, 30 (1988): pp.61-88.
- 4 この議論の詳細に関しては、以下を参照。鈴木裕子『フェミニズムと朝鮮』明石書店、1994年、山崎朋子『アジア女性交流史』筑摩書房、1995年、上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年。
- 5 <http://www.wsasia.net/>を参照。